

『清水丈夫選集』第一巻・掲載

〈特別声明〉

赤軍派への反革命的襲撃に断固抗議する

(一九六九年九月一五日付『前進』四五一号掲載)

最近おこなわれた国家権力によるブンド赤軍派にたいする反革命的襲撃にわれわれは断固抗議するものである。

この襲撃は、第一には、一月闘争とそれによってきりひらかれようとしている七〇年(代)闘争への予防反革命にはかならない。帝国主義ブルジョアジーは、いわゆる一月対策、七〇年対策について準備万端整ったかのごとく意識的にふるまってはいるが、本心ではまったく自信がないのである。

彼らのぺてん的な沖繩Ⅱ安保政策は日米交渉の行きづまりとして、いまやまったくその反人民的正体を暴露しつつあり、政治的説得力の喪失と政治的威信の失墜はおおうべくもない。大学闘争にたいしても沖繩闘争にたいしてもなんの理屈も説得力もなく、ただ警察力(機動隊出動と破防法適用)と自衛隊の治安出動によってブルジョア独裁まるだしの方策に訴えてのりきろうとしている。この権力Ⅱ正義というむきだしの反革命の横行にたいする労働者・学生・農民・市民大衆の不信と怒りはかつてなく高まっている。とくに機動隊はまさに全人民の怨嗟の的となっており、その横暴にたいしてはどんな手段をもって反撃Ⅱ粉碎してもかまわないという考え方はあらゆる人びとに芽ばえつつあると言える。

こうした背景のもとでは、彼ら帝国主義ブルジョアジーどもは一発の銃声がなにをもたらすかまったく不安でしかたないのである。彼らは、「一月闘争をもって三派(中核派・ブンド・解放派)を完全に葬り、あとはデモ騒ぎはいつさいなしにしたい」とくりかえし言明しているが、逆に、一月闘争抑圧のための国家暴力の使用過多がプロレタリアート人民の真の武装闘争をふくむあらゆる種類の闘争形態の利用・熟達へと導く可能性があることを内心大いに恐れているのである。

(二)

さらにわれわれは、今回の反革命的襲撃についてより本質的には、プロレタリアート人民がブルジョア独裁を粉碎し、プロレタリア独裁を樹立するたまたかいをふたたび世界的Ⅱ現実的課題としてみずからに課しはじめようとしていることにたいして加えられたものとして把握する必要があるだろう。

われわれは、戦後世界体制の根底的動揺のいつそのの激化と日本帝国主義の諸矛盾の危機的深化という時代把握を基礎にして、反帝・反スターリン主義世界革命とその一環としての日本革命という基本戦略をはっきりとかかげ、「安保粉碎・日帝打倒」のスローガンを具体的にうちだしてきた。われわれが今までくりかえし述べてきたように、「安保粉碎・日帝打倒」とは偉大なスローガンなのである。けっして景気づけにもてあそぶことが許されるようなものでは断じてないのである。

このスローガンは革命を訴えているのであり、プロレタリア社会主義革命を訴えているのである。したがってまた、ブルジョア独裁の打倒、プロレタリア独裁の樹立を訴えているのであり、階級闘争の平和的發展から革命的発展への推移・移行、階級闘争の平和的形態から武装的形態（最高形態は一斉武装蜂起）への発展・移行を鮮明に意識しているのである。われわれは、こうした新しい時代への転換期・出発点にたっていることを自覚し、それをこのスローガンによって公然と表現しているのである。

さて、階級闘争の平和的發展期の闘争形態から革命的発展期の闘争形態（一斉武装蜂起を最高形態とする）への移行期・転換期・過渡期の諸問題について若干検討しておくことが必要であろう。プロレタリアート人民は階級情勢や階級の力関係を正確に測定しつつ、もつとも必要かつ適切な闘争形態を過渡的に現実的にかちとりつつ前進しなければならぬ。

階級闘争の形態的發展についてあえて図式的にみるならば、

①平和的ストライキとデモンストレーション、

②ストとデモの戦闘化、その貫徹のための初步的な武装、警察力との衝突、占拠^{とら}、

③ストとデモの革命的貫徹のための（あるいは貫徹のためという形態をとった）比較的水準の高い武装（市街戦化の初步）とレーニンのいわゆるパルチザン戦争の初步的形態との結合、

④一斉蜂起をはっきりと準備しつつ、ゼネスト・デモを基底にしての小戦闘、部分的蜂起

（高度の市街戦など）と広範に發展したパルチザン戦争との結合、

⑤一斉武装蜂起

——などの諸段階にわけることができるだろう。この五つの段階はきわめて荒削りに区分したものであり、われわれはさらに深く研究してゆかなければならない。

レーニンも言っているように、一斉武装蜂起^一狭い意味での革命が基本的な課題になっているか、いないかによって大きく区分されるであろう。われわれは、今日における日本の階級闘争は、蜂起が基本的に課題になる時代への過渡期・移行期あるいはそうした時代の揺籃^{ようらん}期であると考えている。つまり①②を依然として重要な要因としながらも、②から③への道をきりひろくことが緊急の課題になっており、その勝利的遂行によって④から⑤への展望をつかんでゆくということであろう。きわめて实际的に言えば、機動隊制圧をありとあらゆる手段に訴えても実力で粉砕しうるかいなかということである。

階級闘争の闘争形態上のこのような展開は、当然にも闘争組織の再編・強化、党組織の再武装の遂行と固く結びついて進行するものである。とくに先に述べた②から③への今日的課題の達成のためには、全共闘と全共闘行動隊、反戦青年委員会と反戦行動隊の量的・質的強化（死をも恐れない精神的武装をふくむ）の徹底的遂行、その他必要な組織・小組の建設が絶対不可欠となってきたのである。また、党組織の非合法化・半非合法化は必至なのであって、この厳しい組織形態への転換と創造に成功しないならばいっさいは白昼夢と化すで

あろう。六九年四・二八沖繩闘争への破防法適用がわれわれに教えているものを断じて忘れてはならないのである。

以上述べてきたような革命的転換のためのたたかいが開始されつつあるということが、まさに今回の反革命的襲撃を呼びおこしたのである。しかし、われわれは基本的に後退することとはできない。われわれの弱点への敵の攻撃から学びながら前進するのみである。

(三)

次に、赤軍派の諸君へのわれわれの若干の意見を述べておく必要があると考える。

われわれは、諸君が従来のブンドの決定的行きづまり、つまり①基本的に無思想で、諸思想の中間主義的雑炊状態のため、偉大なしかし困難をきわめるたたかいにとって絶対不可欠な党の一致の基礎としての思想的一致が欠如しており、本質的に連合戦線党の域をでることができないこと、②したがって、党的特色の欠如をきたし、それを感じる人びとは戦術上の左翼化でブンドの党派性を確立しようとするが、その先鋭化した方針を組織として貫徹することはできない、などについて必死になって突破しようとしているにもかかわらず、基本的にブンドの純化をしているにすぎないとしか思えないことについて、まず最初に率直に言うておくことが革命家としての礼儀だと考える。

しかしながら、諸君のたたかいが、これからの階級闘争の新しい段階をきりひらいてゆく

うえで不可欠の領域に一步ふみこんでいることは明白であり、貴重な経験であるとわれわれは考える。またそう考えるがゆえに、いくつかの点について注意を喚起せざるをえない。

第一に、諸君の機関紙を通読するかぎりにおいては、諸君が実際に追求しているものは、レーニンのいわゆるパルチザン戦争（三人組から一〇人組程度の遊撃部隊）にあたるもののように考えられるが、であるとすれば、デモ・スト（占拠）の戦闘化・革命化・武装化という闘争形態と結合し、闘争の全体的利害からみてもつともふさわしい質と量をもって展開され、一斉武装蜂起への準備・訓練をなすものとしてあると言える。ところが諸君は、これらの連関について明確にしていけないし、多分に機械的にきり離して、あれかこれかの考えているようである。これは再検討を要するのではないか。

第二に、今までの六七年一〇・八以来の闘争形態がひとつの壁にぶつかっていることは事実であり、新たな突破口が問題になっていることは明白だが、しかしながら、今までの闘争形態の安易な放棄もまたまちがいであると考える。たとえば、六九年四・二八闘争について言えば、それに投入された活動家の量、行動隊組織の脆弱性、精神的武装面でも肉弾戦の思想の弱さ——などについて具体的に総括しなければならぬのである。この点についてはつきりさせておかないと一二月闘争への全共闘行動隊・反戦行動隊の組織化の決定的重要性が軽視されることになりう。また、一種の唯武器論にもなってしまうだろう。

第三に、マルクスやレーニンもくりかえし言っているように、蜂起は、技術としての蜂起

についてのはっきりした構えのないところでは失敗するものである。パルチザン戦争にもパルチザン戦争としての法則があると言える。奇襲性や非公然の準備の原則に反して、諸君はあまりにもあけつひろげなのではないのだろうか。

第四に、階級闘争の武装的発展の開始は、党の非合法化・半非合法化の問題と離れておられないが、それについてほとんどまったく検討されていないように見えるのはどうしたわけであろうか？ 諸君の機関紙でも一言もふれていないのはなぜか？

(四)

われわれは、赤軍派の諸君への権力の反革命的襲撃をけつして他人事として考えることはできない。ましてや、さかしらげにその幼稚さをあげつらうことは断じて正しくない。

われわれのたたかいが一月から七〇年へ、そして七〇年代へとつき進もうとしているとき、帝国主義ブルジョアジーがその反革命的武力をもってたたかいを抑圧しようとしていることは明白であり、われわれが安保粉碎・日帝打倒を空文句にしないためには政治的にも軍事的にも敵をうちやぶる力と体制を構築しなければならぬのである。その観点からありとあらゆる人びとの経験と教訓を撰取しつくして前進しなければならぬのである。

われわれは、いっさいの準備を急速に完了し、反革命的襲撃をうち破り、一月決戦の勝利へむかって怒濤の進撃をかちとるであろう。